

社会的承認と自己承認と

佐々木信夫さま

ご自身の体験をお話いただきました。

意外だったのは、明るくお話しされていたこと。服薬は続いているとのことでしたが、薬の効果だけではないように感じました。冗談を交えながら、人を巻き込むお話しに、佐々木さんご自身の力を感じました。

印象的だったのは、司法試験を受験された動機。「エリートに戻りたかったから」と仰っていました。見事合格され、弁護士となられた佐々木さんが今日、お話下さいました。その明るさの源泉が「自分であることの承認」にあるのではないかと感じました。弁護士というステータスに対する社会的承認に満足を感じる自己承認。超一流大学を卒業され、超一流企業に就職されました。社会的承認に基づく職場でのエリートという自己承認。社会的承認がなくなったとき、自己承認できなくなったのではないかと感じました。

乃木坂スクールで私は、知的障害や精神障害、高次脳機能障害などに係るお話を伺ってきました。そこで、周りの方が障害者ご本人を「承認する力」を感じてきました。ご家族、施設の方々、地域の方々のご本人を「承認している」。ご本人も周りの方の力を感じ、「社会的に承認されているという自己承認」を感じているはずです。お話し下さった皆さんが生き生きとしていました、と私は感じています。

安心したのは、「家族に見捨てられていなかった」こと。佐々木さんご自身も「承認されている」と感じたのではないかと、その土台があったら、司法試験に合格してエリートに戻るという自己承認欲求を満たすことができたのではないかと感じたところです。

少し残念だったのは、弁護士としてどのような活動をされているのか、を(今回は)伺えなかったこと。最近、歪んだ承認欲求が社会問題になっています。承認欲求は人である理由の一つと思いますが、承認するのは社会です。自己承認だけでは社会は歪みます、と思います。

弁護士は「当事者を承認すること」ができるので、素敵なお仕事と思いました。またの機会に、是非お話を伺いたいと思いました。

本日は本当にありがとうございました。

23S2029 中島 薫 (なかじま かおる)

国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 修士課程
医療福祉ジャーナリズム分野 M1